

新史料『生活書店会議記録 1933-1937』について

楊 韜

2018 年暮れ、上海韜奮紀念館編『生活書店会議記録 1933-1937』（図版 1 参照）が中華書局から出版された。鄒韜奮ならびに生活書店を研究対象とする筆者にとっては、この資料集は待望の新史料である。

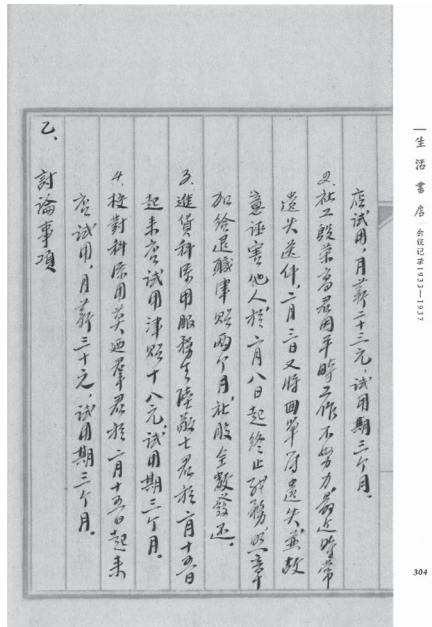
生活書店は、中国近現代史を専門分野とする研究者にはよく知られている出版機関であろう。「近代中国の出版メディア事業の発展史において、商務印書館、中華書局、開明書店など規模が大きく、広範囲に及ぶ影響力を持つものはいくつもあるが、なかでも生活書店はその読者重視の姿勢、及び合作社の経営方式によって人々の関心と支持を集めていた。読者（消費者）と距離が近く、信頼関係を築いていた生活書店は、1930 年代に様々な募金活動を成功させた。そして、その活動は抗日運動の支援へとつながっていった。戦時下、極めて困難な経営状態に直面したが、様々な工夫によってコストを抑え、出版事業を存続させた。生活書店の発展プロセスは、近代中国の出版メディアの一モデルとして看做すことができよう。」（拙著（2015）、246 頁）



図版 1

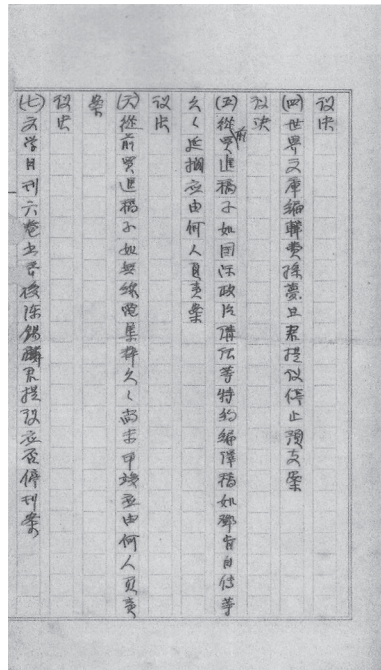
今回出版された『生活書店会議記録 1933-1937』は、生活書店の前期にあたる書店内部の会議記録である。収録されているのは、主に「理事会会議記録」・「人事委員会会議記録」・「臨時委員会会議記録」の三種類である。以下、主に二つの側面から、この資料集が（新史料として）価値が高い点を簡単に述べておきたい。

第一には、生活書店（生活出版合作社）の内部組織に関する記録（図版2参照）である点である。これまで、筆者が長期にわたり生活書店の档案を調査してきたが、存在不明あるいは非公開のため、入手困難であった。ゆえに、韜奮紀念館・北京印刷学院編『店務通訊排印版（上・中・下）』（学林出版社、2007）が唯一の手かがりであった。今回出版された『生活書店会議記録 1933-1937』は、内部管理・人事採用及び処分に関する記録が多く収録されているため、史料の空白を埋めることにおいて大きな意義はある。



図版 2

第二には、生活書店と当時の知識人（作家やジャーナリスト）たちとの関係に関する記録（図版3参照）である点である。一つ例を挙げておきたい。長らく生活書店と鲁迅との関係（とりわけ雑誌『訳文』の廃刊をめぐるトラブル）については、これまで基本的には当事者の一人である黄源による回顧文を参照して考察することは多かった。しかし、今回出版された『生活書店会議記録 1933-1937』のなかに、そのトラブルの経緯に関する記録があり、そこから、『訳文』の廃刊決定が下された理由がわかるのである。



図版 3

以上、簡単ながら『生活書店会議記録 1933-1937』に史料としての価値が高いことを述べた。この資料集の続編として『生活書店会議記録 1938-1939』の出版も予定されている。続編から、日中全面戦争へ突入したあとの諸事情を伺うことができると推測する。大いに期待したい。

参考文献：

黄源『憶念魯迅先生』（人民文学出版社、1981）

上海韜奮紀念館編『生活書店會議記錄 1933-1937』（中華書局、2018）

韜奮紀念館・北京印刷学院編『店務通訊排印版（上・中・下）』（学林出版社、2007）

楊韜『近代中国における知識人・メディア・ナショナリズム：鄒韜奮と生活書店をめぐって』（汲古書院、2015）